

# 算命中庸

## 【初年】 4 2 回目

4 2 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【身強・身弱・身中】

【初年】 4 2 回目【身強・身弱・身中】 01

### □ 身強・身弱・身中

みきょう みじゃく みちゅう  
〔身強〕〔身弱〕〔身中〕〔という勉強を致します。〕

誰でも十二大従星を、人体図に三つもっています。

その三つが全部おなじ星ばかりであれば、占いも簡単なのですが、そうはいかないわけです。

人体図に載っている十二大従星は、強い星もあるし、赤児の星もあり、青年の星もあり、あの世の時代の星

もありますし、老人の時代の星もあります。

人体図には3つの十二大従星が載るわけですが、その3つの従星を総合して見たときに、〔身強になります〕とか〔身弱になります〕とか〔身中になります〕と、に「身強」「身弱」「身中」の3つの判断基準のどれかに分類するわけです。

人体図をだしたら必ずする“分け方”なのです。

身強・身弱・身中は、占いでつかいます。

### 身強・身弱・身中

参考資料 (1)

強星〔天将星〕〔天禄星〕(天南星)

弱星〔天報星〕〔天胡星〕〔天極星〕〔天馳星〕

中星〔天貴星〕〔天恍星〕〔天堂星〕〔天印星〕〔天庫星〕

身強— 人体図に強星を1星、または1星以上所有するもの

身弱— 人体図に弱星を多く所有しているもの

身中— 人体図に中星を多く所有しているもの

☞ “分け方” の説明をします。

固有の人体図が〔<sup>みきょう</sup>身強〕〔<sup>みじやく</sup>身弱〕〔<sup>みちゅう</sup>身中〕のどれになるのかという分け方から始めます。

02 ページ 参考資料 身強・身中・身弱 を見てください。

強星（きょうせい）

弱星（じやくせい）

中星（ちゅうせい）

十二大従星の強さが三段階に分類されています。

天将星（てんしょうせい）

天禄星（てんろくせい）

天南星（てんなんせい）

} 強星は3つです

この3つが強い星〔強星〕と覚えてください。

なぜこの3つが強い星〔<sup>きょうせい</sup>強星〕なのかといいますと、天将星は家長の時代、天禄星は壮年の時代、天南星は青年の時代です。

つまり、世の中でチカラを発揮できるであろうという時代がこの3つの時代であるはずです。

家長、壮年、青年、この3つは大人の時代です。

子供ではなくて立派な大人です。

老人とかの晩年期の星でもないわけです。

この3つの時代は、心身ともに充実して世の中で活躍できる時代という位置づけで〔強星〕と考えます。

⇒ 弱い星〔弱星〕は、世の中でチカラを出せないと想われる時代です。4つあります。

\*天報星（てんぽうせい）胎児は〔弱星〕です。

産まれる前は世の中でまったくチカラを出せません。

\*天胡星（てんゆめせい）病人の星は〔弱星〕です。

死の病し やまいの時代ですから、世の中でチカラを出せません。

\*天極星（てんきょくせい）死人の星は〔弱星〕です。

すでに肉体は滅びて死んでいる星ですから、世の中ではチカラが出せません。

\*天馳星（てんそうせい）は、あ彼の世の星は〔弱星〕です。

あの世の星なので、当然チカラを出せないのです。

4つの弱星は「胎児」「病人」「死人」「彼の世」です。世の中でまったくチカラが出せない星を〔弱星〕と、分類するわけです。

☞〔強星〕と〔弱星〕以外の星はすべて中位ちゅうぐらいのエネルギーだと考えて〔中星ちゅうせい〕に分類します。

\*天貴星（てんきせい） 児童の時代なので、胎児とか死人よりは強いわけです。でも、青年や壮年の大人よりは弱いのです。ゆえに天貴星を〔中星〕に分類します。

\*天恍星（てんぴかせい） 少年の星〔中星〕です。

天恍星は、思春期、中学生・高校生位の時代です。

未成年で大人の星よりは弱いですが、胎児とか病人よりは強いですから〔中星〕に入るわけです。

天恍星（てんぴかせい）と発音してください。

天胡星（てんこせい）とはっきり区別するためです。

チョット発音が変わると、聞き違えてしまうのです。

星の意味が全く違います。

\* 天堂星 (てんどうせい) 老人の時代〔中星〕です。

老人は、引退後の時代ですからチカラは衰えています。しかし、胎児とか病人に比べれば、まだまだチカラが強いです。という意味で〔中星〕に入ります。

\* 天印星 (てんいんせい) 赤ん坊は胎児よりは強いです。

大人と比較すれば、弱いですから〔中星〕です。

〔天貴星・天恍星も大人と比較して、弱いと位置づけています〕

\* 天庫星 (てんくらせい) 死後の時代の星〔中星〕です。

天庫星は“成仏した時代”で精神は安定しています。

〔死後の時代は、すでに成仏していますから、魂が安定している。という意味があります〕

その意味で、おなじ死後の時代の天極星や天馳星よりも“強い”と考えます。

また、天庫星 (てんくらせい) には、長男の星という意味がありますので、長男として一家を守って行く、家系を継いで行くというチカラがある星なので、死後の時代では、唯一〔中星〕に分類されています。

☞ 天印星と天庫星の2つは〔中星〕に分類されています。中星ではあるのですが、中星のなかでは弱星に近い星という意味があります。

ここは焦点になる部分です。

### 天印星と天庫星は〔中星〕のなかで〔弱星〕に近い星

十二大従星は〔強星〕〔弱星〕〔中星〕の3つに分類されています。

天印星と天庫星は、一応〔中星〕なのですが……、中星のなかでは、そのチカラ（エネルギー）は弱いほうになると考えています。

つまり『天印星』は赤ん坊ですから、弱星の胎児よりは大きいし、エネルギーも強いわけです。

でも、ほかの天貴星（児童の星）や、天恍星（少年の星）あるいは天堂星（老人の星）に比べれば、赤ん坊は弱いのです。

そのために、天印星は中星なのですが、中星のなかでは、弱星に近い星だという意味があります。

【天庫星】も、一応、中星に入っていますが、この星も死後の世界・入墓の時代ですから、ほかの〔中星〕に比べれば、中星のなかでは弱い星なのです。

そうしますと、〔強星〕〔弱星〕〔中星〕という分類ということでは、人体図のなかに〔弱星〕が何個<sup>なんこ</sup>あると、身強・身弱・身中の分け方で、どれに分類されますよ。とか、弱星と強星が混ざっている場合は、身強・身中・身弱のどれに当て嵌まりますよ。と決める必要があります。

つまり、人体図に載っている十二大従星の 3 つを合計して、最終的に、身強・身中・身弱のどれかに分類するのです。

その“分け方”をご説明していきます。

☞ まずは「身強」です。 ➡



## ＊ 『身強』

### 身強 — 人体図に強星が 1 つ以上あるもの

天将・天禄・天南のどれかが、人体図に 1 つでもあれば身強に分類されます。

人体図のなかに、ほかの 2 つが弱星であっても——

天将・天禄・天南のいずれかが、1 つでもあれば身強になります。

つまり、天将・天禄・天南は、いずれも強星ですから、人体図に出てくる 3 つの従星のなかに、1 個でも強星が混ざっていると、その人体図の特徴になります。

天将星はエネルギー 12 点で一番強い星ですから、1 個でも人体図にあれば、それだけで天将星の人体図だとして、そこがその人体図の特徴だとみなします。

強星が 1 個あれば、残りの 2 つが弱い星だとしても、強い星のほうが目立ちます。

言い換えれば、強星 1 個あれば、ほかの星はチョット霞んでしまう、そのような意味合いになってきます。

身強の人体図

宿命 ( 1 )

天南 [強]		

身強の人体図

宿命 ( 2 )

		天将星 [強]

人体図に天将・天禄・天南が、1 個でもあれば身強です。でも、1 個もなければ、身中か身弱のどちらかになります。

☞ 身中と身弱の見分け方がやや複雑です ➡

＊『身中』と『身弱』の見分け方がやや複雑です。

わかりやすく、並べながら書いていきます。

『身中』は〔中星〕3つ

人体図の従星がすべて〔中星〕であれば、当然ですが、その人は身中です。

身中の人体図

宿命（3）

		天恍〔中〕
天堂〔中〕		天庫〔中〕

『身弱』は〔弱星〕3つ

人体図の従星が3つとも〔弱星〕であれば、当然ですが、その人は身弱です。

身弱の人体図

宿命（4）

		天馳〔弱〕
天報〔弱〕		天胡〔弱〕

身弱は弱星3つです。

それから〔弱星〕 2 つ、〔中星〕 1 つは『身弱』です。

身弱の人体図

宿命（5）

		天馳〔弱〕
天馳〔弱〕		天貴〔中〕

宿命（5）のように、弱星 2 つで、中星 1 つ、この組み合わせの人体図があれば、これも身弱です。

弱星 2 つで、中星 1 つの組み合わせは、弱星のほうが多いので身弱になります。

つまり人体図に〔中星〕は 1 つありますが、弱星 2 つのほうが傾いていますから身弱なのです。

『身中』の人体図は〔中星〕 3 つです。

身中の人体図

宿命（6）

		天堂〔中〕
天貴〔中〕		天恍〔中〕

そして、中星 2 つ、弱星は 1 つ、この組み合わせで、  
 【天印星】か【天庫星】の入らないものは『身中』です。  
 中星が 2 つある人体図でも、弱いほうに位置する中星  
 【天印星】か【天庫星】が入っていませんから、立派  
 な中星 2 つだとみなして、『身中』に近い人体図としま  
 す。宿命(7) は『身中』になります。

身中の人体図

宿命(7)

		天堂〔中〕
天馳〔弱〕		天恍〔中〕

弱いほうの〔中星〕である【天印星】も【天庫星】も入っていません。

ところが、中星 2 つ、弱星 1 つ、という組み合わせに  
 なっていても、【天印星】か【天庫星】の入っている  
 人体図 宿命(8) は『身弱』です。

本来【天印星】は弱い（弱星）に近い中星なわけです。

身弱の人体図

宿命(8)

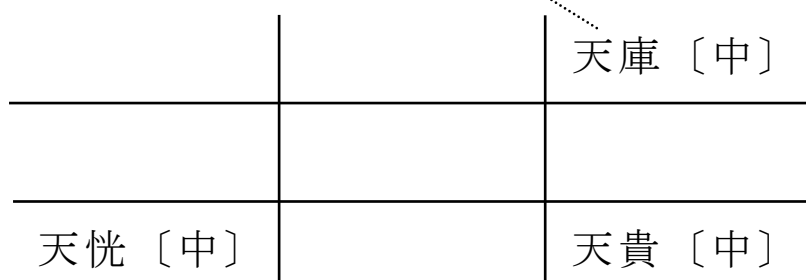
		天印〔中〕
天堂〔中〕		天恍〔中〕

そして、中星 2 つ、弱星 1 つ、という数はおなじでも  
 『天印星』か『天庫星』が入れば身弱の人体図です。  
 このことは 宿命(8) で説明しましたように『天印星』  
 と『天庫星』は、弱星にちかい星なので、身弱に近いと  
 考えるわけです。

本来『天庫星』は弱い(弱星)に近い中星なわけです。

身弱の人体図

宿命(9)



こここのところは、注意が必要です。

このように“分け方”を書きましたけど、どのような  
 人体図でも、必ず、これらのなかのどれかに<sup>が</sup>該当しま  
 す。

この分け方で、その人体図は〔身強〕なのか、〔身弱〕  
 なのか、〔身中〕なのかを判別してください。

## 『身強』『身弱』『身中』

参考資料(2)

宿命を大きく3つに分けて、特徴を知ること、どのように生きていくかを観るのです。

どのようにしたら、運勢を延<sup>の</sup>ばせるかを見ます。

十二大従星を活かせないと、十大主星も生かせません。

〔弱星〕〔強星〕〔中星〕というのは、『身強・身弱・身中』とは違います。

『身強・身弱・身中』⇒ 宿命全体を指しています。

〔弱星〕〔強星〕〔中星〕⇒ 星1つ1つの強弱をいいます。

強星 〔天将星〕 〔天禄星〕 〔天南星〕

弱星 〔天報星〕 〔天胡星〕 〔天極星〕 〔天馳星〕

中星 〔天貴星〕 〔天恍星〕 〔天堂星〕 〔天印星〕 〔天庫星〕

〔天庫星〕は、本来〔弱星〕でよいのですが、成仏して、彼の世で安定しているという意味で〔中星〕くらいとしています。肉体は死んで成仏していますので、〔中星〕のなかでは1番弱い星です。

『天印星』は赤ん坊の時代、現世に生まれたばかりですから  
〔中星〕のなかでは弱いほうです。

『身強』『身弱』『身中』の分け方：

『身強』宿命のなかに、1つでも強星があれば、どの場所にあっても、身強の宿命です。

		天馳〔弱〕
天将〔強〕		天馳〔弱〕

人体図に天馳星というエネルギーの1番弱い星が2つあっても、天将星が1つあれば身強になります。

『身弱』〔弱星〕が多い場合をいいます。

中星が1つに弱星が2つの場合も身弱になります。

『身中』〔中星〕が2つ以上ある場合をいいます。

しかし、1つでも強星があると身強です。



㊶と㊷は『身中』です。

㊶のほうには『天印星』が1つ入っています。

このように〔中星〕と〔弱星〕が1対1で入っている人体図の場合、そのなかに『天印星』か『天庫星』があると……、『身弱(身弱的)』と考えます。それゆえに㊶は『身弱』です。

実際には、強弱の差はあまり違わないといえ、違わないのですが、微妙な違いはあります。

そのとき、星の“分け方”によって、人生の生き方が違ってきますので、覚える必要があります。

しかし、大きく2つに分けるとときには、『身強』と『身弱』に分けています。

㊶		天堂〔中〕
	<u>天印星</u>	天馳〔弱〕

㊷		天貴〔中〕
	天堂〔中〕	天極〔弱〕

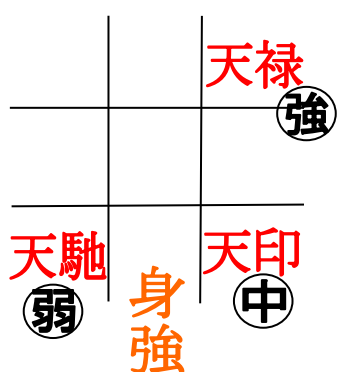
☞『身強』と『身弱』に“大きく分ける”ときは――、

人体図に強星が1つでも含まれていたら身強です。

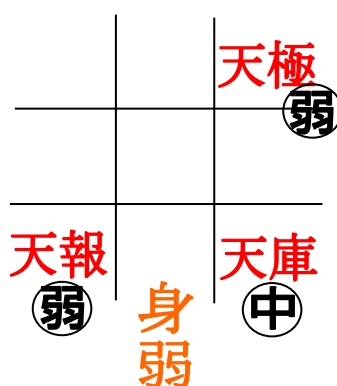
人体図に強星が1つも含まれていなければ身弱です。

『身強・身中・身弱』 練習問題

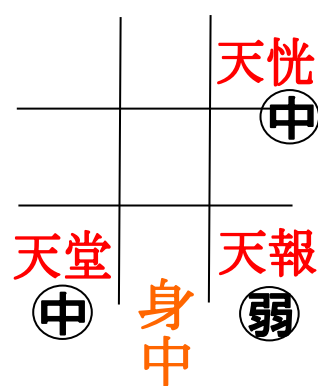
1.



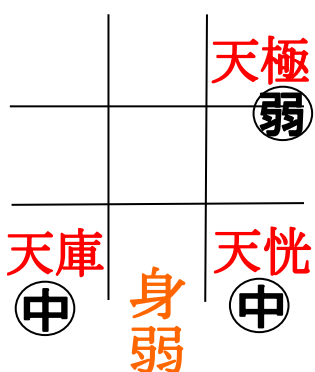
2.



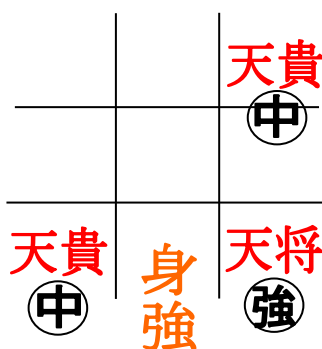
3.



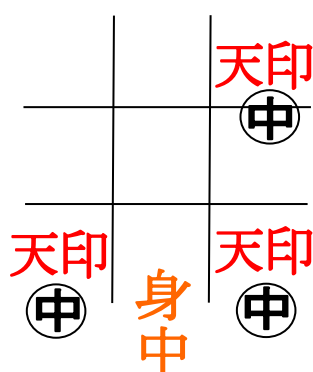
4.



5.



6.



☞ チョット簡単に“分け方”の練習です。

1 番だと、天禄・天印・天馳は ④強 ④中 ④弱 だと、  
わかるように、あらかじめ強弱を書くとよろしいかと思  
います。○を書く必要はないですよ。

全部書いてみますと、18 ページのようになります。

18 ページを見れば……〔天極は弱星〕〔天庫は中星〕  
〔天報は弱星〕だということがわかります。

つぎに、先ほどの分類に従って『身強・身弱・身中』に分類し  
ていきます。

☞ そうしますと……、

1 番は何になりますでしょうか？ そう『身強』ですね。

1 番は、天禄星の〔強星〕が 1 つあります。

強星が 1 つでもあれば『身強』です。

2 番はどうでしょう。

『身弱』ですね。2 番は〔弱星〕2 つで、〔中星〕1 つです。

『身弱』に該当しますね。

3 番は――。

『身中』ですね。

3 番は、天恍星・天堂星は〔中星〕、天報星だけが〔弱星〕です。すから、〔中星〕 2 つ、〔弱星〕 1 つに該当します。

そして、『天印星』も『天庫星』もありません。

ゆえに、これは『身中』です。

4 番はいかがでしょうか？

『身弱』ですね。

4 番は、3 番とおなじように、〔中星〕 2 つ、〔弱星〕 1 つ。

天庫星・天恍星は〔中星〕、天極星は〔弱星〕です。

ところが、人体図に〔中星〕 2 つで、〔弱星〕 1 つの場合で、『天印星』か『天庫星』のどちらかが入るものは、『身弱』のほうに入れるわけです。

4 番は『天庫星』入っていますから『身弱』です

つまり『天庫星』は弱いほうの〔中星〕なので、身弱のほうへ、傾いているとみなすわけです。

ゆえに『身弱』なのです。

4 番は身中と身弱の境目ともいえますよね。

5 番はどうでしょう？ 『身強』ですね。

これは〔強星〕が1つでもあれば身強です。

ほかにおなじ星が2つあったとしても、〔強星〕が1つでもあれば『身強』になります。

最後、6 番『天印星』 3つは、いかがでしょうか？

これは身中ですね。中・中・中と〔中星〕が3つです。

これは文句なく『身中』です。(なんの星であろうとも)

☞ 6 番のように、人体図に、〔天印星〕 〔天庫星〕ばかりの場合は、<sup>まど</sup>惑わされないようになさってください。これは『身中』です。

6 番のような人体図で〔弱星〕が1つでも入っていて、〔天印星〕か〔天庫星〕があれば『身弱』になりますが、6 番はもともと〔弱星〕がないです。

それゆえに『身中』です。

このような要領で分ければよいのです。

⇒ そうしますと『身強・身弱・身中』の意味を知っておかないと、占いはできませんから、その意味について説明していきます。

※『身中』は後回しにします。

身中というのは中間です。

身強と身弱の違いを理解すると、自然と身中は理解できるようになります。それゆえに、身強と身弱の違いこそが大切だと考えてください。

⇒ 『身強』と『身弱』の意味の違いから説明します。

『身強は現実面に強い』 『身弱は精神面に強い』このような違いがあります。

身強と身弱では、得意な分野とか、あるいは、生き方が異なるのです。

身強と身弱では、得意な分野、生き方が異なる

占うとき、人体図の『身強・身弱』は必ず観ます。

そこで、身強と身弱を中心に説明していきます ➡

『身強』と『身弱』では、得意な分野・生き方が異なりますから、身強が得意なものは、身弱は苦手なわけです。身弱が得意なものは、身強は苦手です。

『身強』と『身弱』では、もともと性格が違うのです。しかし、どちらが良いとか、悪いとか、いえません。それは、得意な分野、生き方が違うからです。

身強と身弱では、得意な分野・生き方が異なる



どちらが良いとはいえない

これは言葉の響きとしては……身強と身弱というとなにか身強のほうがりっかりしていて、運勢もしっかりしているような印象を受けやすいと想いますが、身強のほうは運が強いとか、いい宿命だとか、そういう意味合いは一切ないのです。

身強と身弱では、質的に持ち味が違うので、どちらが良いとかはいえないのです。

まず——このことを頭に入れておいてください。

『身強』と『身弱』を対比させながら考えるとわかりやすいと思います。

身強はエネルギーが強い宿命です。

身強 ⇒ エネルギーが強い

身弱はエネルギーが弱い宿命です。

身弱 ⇒ エネルギーが弱い

身強の人体図は、天将・天禄・天南のどれかが、最低でも1つあるわけです。

人によっては、<sup>きょうせい</sup>強星が2個も3個もある人体図の人もいます。

身強の人は、最低1つは強い星をもっていますから、強星が1つもない人と比べると、強いエネルギーを与えられて生まれてきたといえます。

強いエネルギーを与えられて生まれて来たのですから、性格的にも気が強い人になります。

### 気が強い

身強は心のあり方（気持ち・感情）が強いです。



自分の気持ちを曲げない性格ともいえます。

強いエネルギーということでは芯しん（根本こんぽん）が強いです。

### 気が強い、芯が強い

少々の事では動じないような、強さを持ちます。

〔たとえば〕弱星じやくせいの多い人体図を想い浮かべますと、胎児の星、病人の星、死人の星、というように、弱い状態の星ばかりといえますから、どうしても性格的に気が弱いです。

### 気が弱い、芯が弱い

身弱は本質的に気が弱いです。

『身強』と『身弱』では、本質的に上記のような違いがあると考えてください。

参考・気持ち〔物事に対して感ずる心のあり方〕

参考・気が強い〔自分の気持ちを主張して強気である。強情ごうじょう〕

参考・気が弱い〔強く自分の気持ちをあらわすことができない〕

参考・気弱〔心のもちかたが弱いこと〕

☞ しかし、身強と身弱で争ったら、身弱のほうが強いことは多々あります。

質的しつてきには、身弱のほうが気弱きよわですけど、気が弱いから負けるとは決まっていらないのです。

参考までに：

- ・左「横綱・貴乃花」

人体図は〔弱星〕ばかり最身弱さいみじやくです。

- ・右は「貴景勝」

人体図は〔天印星〕〔天庫星〕があり身弱みじやくです。

＊ 貴乃花・光司

1972(s47)-8-12

	玉堂星	天胡星
石門星	司禄星	龍高星
天極星	司禄星	天報星

＊ 貴景勝

1996(h8)-8-5

	鳳閣星	天恍星
禄存星	司禄星	玉堂星
天印星	石門星	天庫星

参考・質（しつ）〔そのもの本来の性質。うまれつき〕

参考・本質〔そのもの特徴となっていて、それを抜きには、その存在が考えられない独自の性質〕。

参考・本性（ほんしょう）〔ふだんは隠れて見えない、生まれつきの性質〕

参考・天性（てんせい）〔うまれつき備わっている天から授かった性質〕

☞ 話をもどします。

エネルギーはつぎのように理解していただくとよいでしょう。

エネルギーを食べ物にたとえて考えるとわかりやすいのです。

カロリーの高い食べ物をたくさん食べたのが身強です。高カロリーの食べ物をたくさん食べたら、体もたくさん動かさないと身体に悪いですよね。

高カロリーの食事をして、食べたらすぐゴロツとして、食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返していれば、間違いなく健康が損なわれます。

『身強』はたくさんエネルギーをもっていますから、たくさんエネルギーを使える人です。

その多大なエネルギーをどんどん消化するためには、忙しい環境に向いています。

### 忙しい環境に向いている

つまり、エネルギーを消耗する生き方が合っています。言葉を換えれば、活力・気力を消費する生き方に向いているわけです。

### 忙しい環境に向いている



### 元気旺盛で積極的に物事を行う生き方に向く

エネルギーが多いのですから、エネルギッシュな人であることが、宿命に適合します。

それゆえに、身強の人は普通の人以上に「やる事が多くて、忙しくて大変」だというくらいの環境のほうが実力を発揮できます。

そういう生き方のほうが、心も気力も充実しますから実力も発揮できますし、精神も安定実してきます。

それが性しょうに合っているからです。

忙しい環境に向いているわけです。

☞ これは人体図の話ですから、その人物が『身強』であっても、実際に体力があるのか……それはわかりません。それは全く別の話です。

身強のほうに体力はあるという意味ではないのです。

身弱は体力がないという意味ではないのです。

身強は宿命的にエネルギーが強いから、どんどんエネルギーを使う生き方が宿命どおりですよ。とそう言っているわけです。

つまり、身強の人でも生れつき体が弱いということもあり得るわけです。生れつき体力がないということもあるわけです。

ただ、身強がそうになるとチョットしんどいのです。

身強の人は、普通の人以上にエネルギーを使う生き方、忙しくて、やる事が多い生き方に向いていますから、それだけの事をやりこなせるだけの体力をつくらなくてははいけません。

☛ 悪い事例をいえば、せっかくエネルギーが強いのに使わないでいると、余ったエネルギーが腐ってしまうと、算命学では考えるのです。

たくさん食べ物を食べたのに、体を動かさないでいれば、体もどんどん太っていくでしょうし、中性脂肪も蓄積しますから、いろいろと悪いほうへ作用します。それとおなじなのです。

エネルギーをたくさん与えられているのに使わなければ、余ったエネルギーが腐ってしまうわけです。

『身強』でエネルギーを使わない典型的なパターンは過保護に育つことなのです。

過保護で育つと運勢が伸びなくなります。

過保護に育つと運勢が伸びなくなる



精神か肉体のいずれかに欠点を出す

過保護で育つと精神か肉体のいずれかに、欠点が出ると思ってください。

身強の子供を親がすごく甘やかして、何でもかんでも親が子供に力を貸してあげて、本来は子供が自分でやるべきことも、親が代わりにやってしまうとなったら、この子は自分でエネルギーを使わなくて済みます。

そのときは、楽かも知れませんが、子供はエネルギーが強いのに、親が代わりに何でもやってくれるから、子供のエネルギーは停滞して溜まってしまいます。

そうすると、過剰に余ったエネルギーは、運勢のうえで腐ってしまうようなものです。

運勢的にも下がって行きます。

結果的に……どこに禍なり、欠点が出るのかについては、これだけではわかりませんが、いずれにしても、精神か肉体のどちらかに欠点が出ます。

⇒ 今度はここまでのところを『身弱』で考えます。

身弱はエネルギーが弱く、少ししかエネルギーの蓄積がないわけです。

それなのに、自分が置かれた環境が、すごく忙しいとすれば、エネルギーが不足します。ガス欠になってしまうようなものです。

ゆえに『身弱』は忙しい環境には向かないのです。

**身弱は忙しい環境に向かない**

一般に人生でいえば、身弱の人は、忙しい会社とか、残業が多い会社とか、そういう会社は辞めたほうがいいです。厳しくされ過ぎると運勢も伸びなくなります。

### 身弱は厳しくされ過ぎると伸びない

身強の反対を考えればいいわけですね。

身強は過保護にされると伸びない。

身弱は、厳しくされ過ぎると伸びない。

端的にいえば、身強の子供であれば厳しくしたほうがよいですね。

身弱の子は、いくぶん大事に育てたほうがいいですね。

そのほうが伸びます。

☞ お断りしておきます。

ここでは十二大従星の『身強』『身弱』に関してだけの話です。

人体図の十大主星の話は入っていませんし、加味していません。それでも『身強』『身弱』は重要なのです。

さて、ここまでの話として——『身弱』を考えると、気弱で忙しい仕事に向かないし、厳しくされると伸び



ないし、となれば、何か頼りなくてダメな宿命なのではとか、そのような気持ちが湧き上がってきたかもしませんが……『身強』『身弱』を比較して、どちらの宿命が良い、どちらの宿命が悪い、一切ないですよ。

そこで、今度はつぎのように考えるのです。

身弱は少しのエネルギーしか与えられていないので、エネルギーが弱いです。

少しのエネルギーしか蓄積できませんから貴重です。貴重なエネルギーを消費して生きていくことになりますから、エネルギーを上手に使わないといけません。

〔たとえば〕天胡星（てんゆめせい）は病人の星です。

死ぬ一歩手前です。死の病<sup>し やまい ふ</sup>に臥した病人です。

体力はもうわずかにしか残っていません。

無駄にエネルギーをつかえば、すぐダウンしてしまいます。

そうならないためには、生きる手段として、少しのエネルギーを要領<sup>ようりょう</sup>よく上手に使えばいいわけです。

それゆえ、身弱のほうが要領がよい人になります。

### 要領がいい

参考・要領 [物事をうまく処理する手順やこつ]

そうしないと、身強に対抗できないわけです。

『身弱』は“気が弱い”と書きましたが、特に新しい物事を始めたときに、その傾向が出ます。

### 特に新しいことを始めるときに出る

新しく仕事を始めたときとか、新しい環境に入ったときとか、あるいは、初対面の人に会うときとか、何か新しいことを始めるときに、気の弱さが出るのです。

何故かといいますと、エネルギーが少ししかないのに、最初からどんどんエネルギーを使ってしまえば、<sup>あと</sup>後の<sup>かんじん</sup>肝心なときにエネルギーが不足することも起こります。それゆえに、最初は自分で自分を抑制するような本能がうごきだす。

そのように算命学は考えているのです。

少ししか無いエネルギーを、最初からドンドン使えば欠乏します。そこで最初は自分を押さえるような本能が働きます。

そのために、特に最初は気弱な面が出ると考えます。このことはどなたでもそうでしょうが、身弱にはエネルギーが弱いという特徴があるわけです。

何か新しい物事を始めたときには、その進め方とか、処理の仕方もよくわかっていませぬので、どうしても無駄なエネルギーを消耗しやすいため、無くなってしまふのです。

でも、ある程度……その相手や、環境に慣れてくると要点がつかめますし、主要な手順がわかってくれば、気の弱さは無くなります。

#### 物事や相手に慣れると気の弱さは出なくなる

むしろ、気の強い面が出てくるようになります。

処理する手順をつかんで「ああ、このようにやればいいのだ——」ということが<sup>わか</sup>解れば、エネルギーを上手に使うことができます。自分で自分を抑える必要はなくなって、気の弱さも取れてしまいます。

∞ 『身強』にもどります。

身強【天将星】 【天禄星】 【天南星】 の3つです。

いずれも現実面に強い星なわけです。

現実面に強い



現実的苦勞に強い

現実面に強いというのを、言葉を変えますと、つぎのようにもいえます。現実的苦勞に強いです。

【天将星】 【天禄星】 【天南星】 は大人の時代です。この世で生きて行く中心に位置する時代といえますから、この世の現実面に対応するチカラはほかの星よりも秀<sup>ひい</sup>でています。

現実面に強い・現実的苦勞に強いです。

それに耐えられる強さを備えているわけですから……

現実的苦勞をしなさい。ということになります。

現実的苦勞に強い → 苦勞しなさい

〔身強は過保護にされると伸びなくなる〕といたしましたが、現実的苦労に強いのが、現実的苦労をなささいということです。

そうすると、この宿命は伸びていきます。

現実的苦労というのは、具体的にいえば、お金とか物とか、あるいは、時間的に忙しくて大変だと、それも現実的苦労です。算命学は時間を現実と考えています。

あるいは、肉体的苦労に強いのも身強のほうです。

病気は肉体的苦労ですから、病気に強いのは身強のほうです。

身強は病気にならないという意味ではなくて、病気になっても強いです。

いいかえれば、エネルギーが消耗するまでは、死にたくても、なかなか死ねません。これも大変ですよ。

とにかく、現実的な苦労には身強のほうが強いです。

☞ 身弱はその反対です ➡

⇒ 『身弱』は精神面に強いです。

精神面に強い ⇒ 精神的苦勞に強い

いいかえれば、精神的苦勞に強いです。

「精神的苦勞をしなさい」という意味になります。

〔たとえば〕学校で虐められて、登校拒否になるのは、身強と身弱では、身強のほうが多いといえます。

『身強の子』は現実的苦勞には強いのですが、精神的苦勞には弱いのです。

身強は現実的に鍛えられて、精神性を強くしないといけません。現実まだ鍛えられてない子供なのに、学校に行って、虐められたりして登校拒否になったり、最悪の場合は自殺してしまう。そのようになる可能性を内在しているのは身強のほうです。

先ほど説明しましたが……特に過保護な環境で育った身強ほど精神的苦勞に弱くなります。

『身弱の子』は気弱ですが、意外と虐めに強いです。虐めは精神的苦勞だからです。

参考・現実〔現に事実として目の前にあらわれている状態・物事〕

参考・現実的〔現実に関するさま。現実在即しているさま〕

算命学で「これは強い」とか「これは弱い」とかいう事柄が出てきたら『常に強いほうを鍛えなさい』この方法が鉄則なのです。

強い方を鍛えるのです。

弱いほうを鍛えてはいけません。

「強いほうをたくさん使いなさい」ということです。

身強は、現実面が強い<sup>つね</sup>のだから、現実面を鍛えなさいということになります。

せっかく、現実的苦勞に強い宿命を与えられているわけですから“現実的苦勞をしなさい”そうすることで身強は精神が鍛えられます。

それゆえに「身強の子供が生まれたら、過保護に育ててはいけません」というのが算命学の世界です。

自然界の動物や鳥はそうですよね。

ライオンでも、あるときが来たら、自分が産んで可愛がって育てた子供を無理やり親離れさせます。そうしないと、子供が生きていけないからです。

一生懸命に餌を運んで育てた小鳥を、親鳥から無理やり巣から追い出しますよね、そうして小鳥は巣立っていくのです。

そのような<sup>きび</sup>厳しさが、身強の子には必要なのです。  
親がそれをできたら、身強は見事に育ちます。

ゆえに、たとえ兄弟であっても育て方は別なのです。  
算命学は「子供を平等におなじく育てなさい」とは、  
いわないのです。

それは親にとっては実に<sup>きび</sup>厳しいことでしょう。

「獅子は自分の子を谷底に突き落とす」このような  
<sup>ことわざ</sup>諺があったと思いますが、それは身強の子供のこと  
です。

特に最身強であったらなおさらです。

しかし、親がそれをできないというのが現実です。

このことは“<sup>こぎやくたい</sup>子虐待”とは、まったく次元の違う話で  
す。おわかりいただけますでしょうか……。



⇒ 『身弱』は反対です。

身弱が精神的な苦勞に強いということは、精神的苦勞をなささいということです。

そうすることで、現実的な側面が強くなるのです。

つねに“強いほうを鍛える” そのように思っておけばよろしいですね。

『身弱は精神を鍛える』 『身強は現実を鍛える』

“身弱の人は要領ようりょうがいい” と書きましたけど——、  
身弱は精神にかかわる苦勞に強いです。

それなのに要領よく（手際てぎわよく）精神的苦勞から逃げ出してはダメなのです。

人生の過程かてい、毎日の生活、そこでイヤなことがあったり、辛いつらことがあったりしたら、イヤなことは早く忘れて、楽しいことだけ考えようと、そういう生き方を  
して行くと、身弱はどんどんダメになっていきますよ。

よく「つらいことは早く忘れて、明るく生きよう」とか、ラジオやテレビから、耳に入って来ますが、身弱はそのような生き方をしてはダメなのです。

参考・精神〔こころ。意識。たましい〕〔折にふれて喜怒哀楽の感情

をいだいたりする根源にあると捉えられる心に働き〕

参考・精神的〔精神にかかわる状態。精神に関することを重んじる〕

参考・現実〔現に事実としてあり、無視することができない事柄〕

参考・現実性〔現実が存在しているすべてのもののあり方や特質〕

〔現実が存在している性質や性格。現実態〕

参考・現実的〔現実在即していること。実際にあるさま〕

参考・側面〔さまざまな性質のうち、表面に現れていなかった質〕

参考・過程〔進行していく物事のありさま。経過する一連の現象〕

つらい事、悲しい事があってもそこから逃げないで、  
何でそうなったのか、自分にどのような原因があった  
のか、よくよく考えて、精神で苦しむことです。

身強のように肉体（現実）をいためて鍛えるのではなくて、  
精神をいためて・磨いて鍛えるのです。

身強であれば肉体エネルギーを使って鍛えていくわけです。

『身弱』には余分なエネルギーが無いわけですから、  
静かに<sup>かえり</sup>省みて、深く精神を磨くとよいのです。

自分の行動を省みるわけです。＝反省

お釈迦様は「止観<sup>しかん</sup>」とっています。

そのようにして、身弱が精神を磨いていくと、強くて  
たくま  
逞しい人物になって行くのです。

ところが、現実的苦勞を与えられてしまうと、身弱の  
人は潰れやすいです。

特に子供の頃から、現実的な苦勞ばかりをさせられて  
しまうと、潰れてしまうか、あるいは、要領がいいも  
つぶ  
のですから、性格がひねくれ素直でない人間になって  
しまうか、いずれかになる傾向があります。

言葉で説明しても、なかなかピンと、来ないとおも  
いますけど……[たとえば]Aをやったら失敗しました。

### **A**をやって失敗

**A**というのは、何でもいいです。

商売やったら失敗したとか、こういうことをやったら  
失敗したとか——何でもいいです。

まあ、**A**をやって失敗したとします。

そのときに、これが身強であれば、**A**で失敗したから  
つぎは**B**をやる。それでもダメなら**C**というように、  
エネルギーがありますから、いろいろとやって試して、

どれがよいのかを決めればいいわけです。

身強は、Bをやったり、Cをやったり、Dをやって

どれがよいのかを決めればいい

身強は[とにかく実行しなさい]ということなのです。  
現実的苦労を消化するには、現実的苦労をしたらよい  
のです。実行・行動あるのみということです。

ところが……、

『身弱』は、Aをやって失敗したので、Bのやり方を  
したり、Cをやったり、Dをやったりと、いろいろと  
試すだけのエネルギーはないわけです。

それゆえに『身弱』には、このやり方は向きません。  
その替わり、身弱は精神的苦労に強いわけですから、  
[なぜ失敗したのか、どこかに原因があるはずだ……]  
と、考えることです。精神をうごかすのです。

身弱 ⇒ 精神をうごかして、なぜ失敗したのかを考える



悩み、反省する ⇒ 本領を発揮する

Aをやって失敗したのであれば……何故故それが失敗したのかをよく考えて、自分のどこがいけなかったかと悩み、苦しんで、反省して、つぎへ繋げるのです。そのようにして、身弱は本領<sup>ほんりょう</sup>を発揮すればよいのです。

参考・本領 [本来得意とする特質]

参考・情にもろい [思いやる心をうごかされる心のはたらき]

そうしますと——これまでの話で、身強と身弱では、“情にもろい”のは、どちらのほうだと想いますか？これは身強です。身強は情が深いともいえます。

### 身強 — 情にもろい

身弱は精神的苦勞<sup>じょう</sup>に強いので、情にもろくないのです。それゆえに、精神的苦勞に耐えられます。

### 身弱 — 情にもろくない

「気が弱い」これは“情に負けやすい”と記されている辞書もありますが、算命学では、そのような捉え方をしていないのです。

算命学は“情に負けない”情に従わないと考えています。

演歌は身強の世界かも……男と女が情を引きずりあっていますけど、その相手が身弱だとなかなか通じないでしょう。

ただし「情が深いから善<sup>い</sup>い人」という意味とはまったく違います。

身強にも、善人もいれば悪人もいます。

身弱にも、善人もいれば悪人もいます。

これは、本質的な性格の違いを言っているだけです。その人が〔善人なのか〕〔悪人なのか〕どうかという意味ではないのですが、情にもろいのは身強です。

情がからんで頼まれると、イヤとは言えないとか……、「あなただけが頼りなの……」とかいわれてしまうと身強の人は情が深いので、すごく親身になってやってくれます。そういう一面をもっています。

演歌の世界がそうだとは言いきれませんが、ちなみに  
演歌の女王ともいえる美空ひばりさんは<sup>さいみきょう</sup>最身強です。

＊ 美空ひばり 1937(s12)-5-29 1989-6-24 [52 歳没]

	丙	乙	丁		石門星	天印星	3 丙午
子	辰	巳	丑	鳳閣星	貫索星	調舒星	13 丁未
丑		甲	戌	天南星	玉堂星	天祿星	23 戊申
		己	壬				33 己酉
	卯	壬	庚				43 庚戌
							53 辛亥

お断りしておきますが、身強は歌がうまいという意味ではないです。身強が歌手として大成するには、それなりの条件が必要です。彼女は歌手として天性のものをもっていますが、身強という意味でいえば、天性に加えて、子供時代に巡業で命失う危険に遭っています。

また、玄人はだしの父親からの遺伝星をもっています。

さまざまな要因がありますが。命と引き換えに歌唱力を手に入れたともいえるでしょう。

☞ 身弱は理性的（情に左右されない）

〔たとえば〕相手を思いどおりに動かしたいとか——相手に何か物事を頼もうとするのであれば、身強の人には、情で頼むとよいですね。

身強は、情にほだされて、心が動きますが、身弱にそれをやってもダメなのです。

45 頁の下段に、「気が弱い」これは“情に負けやすい”と記されている辞書もありますけど……と書きました。

もともと、身弱は精神面が強くて、情にとらわれない質ですから、情ではなくて、理性に訴えたほうがよいのです。つまり〔……このような理由で、貴方に頼みたいわけです〕と理性的に頼むと身弱は納得します。

〔たとえば〕夫は身弱、妻は身強の夫婦がいたとします。これは逆でもいいですよ。

夫 — 身弱

妻 — 身強

この2人が夫婦喧嘩すると、妻は情で夫婦喧嘩をするようになります。



夫は、理性で夫婦喧嘩をするようになります。

つまり、夫は理屈をいうようになるのです。

夫婦喧嘩をしたら、夫は身弱なので理屈をこねます。

### 夫は身弱 ⇒ 理屈をいう

情ではなくて、理性で戦おうとしますから、どうしても理屈をこねます。

参考・こねる [いろいろ考えて、あれこれ述べたてる]

「君はさっきああいったけど、今度はこう言った。この間はああだったじゃないか……」このように夫がいうと——今度は妻が情でいい返すわけです。

「じゃあ貴方は私のことおもってないのね……」というように、理屈ではなくなるわけです。

### 妻は身強 ⇒ 情にうったえる

この二人のまったく噛み合わないところなのです。

このような事があったときは、身弱の夫は、妻の情の部分を中心に考えてあげると良いわけですよ。

身強の妻のほうは、夫の理性的な部分を中心に考えてあげると、お互いうまくいきますね。

まあ——口では簡単ですけど、なかなかうまくいかないのが夫婦喧嘩です。

「夫婦喧嘩は犬も食わない」といいますが、まったく犬の牙でも噛み切れないのです。

本当は——身弱と身強の相性は悪いのです。

相性については、つぎに説明します。

夫婦でなくても、このような<sup>ようそう</sup>様相があるかと想いますが、もし、喧嘩したり、仲が悪かったりする場合……

『身弱』にいわせると「身強は凶々しい、気が強いし、強情だ」といいます。

身弱から見ると「あの人は凶々しくて、自分勝手よ」  
そういうふうに見えるのです。

逆に、身強にいわせると「身弱はずるい、要領がいいよ」というのは、身強からみれば、身弱がずるく見えることが多くなるわけですね。

それが『身強』と『身弱』の欠点にもなる部分です。

⇒ 身中です。

身中は全て、身強と身弱の間だと考えてください。

### 身中 — 身強・身弱の間

気の強さも中位ちゅうくらい、忙しいかどうかも中位が向いています。過保護か、厳しくか、それも中位がいいです。それが一番合っています。

情が深いとか、理性が強いとか、それも半分位なので身強と身弱の間ちゅうかんくらいの人ということになります。身中はエネルギーが中位なのです。

エネルギーが中位



気の強さも中位

性格的にも、強くもないし、弱くもない。

与えられたエネルギーが中位ですから、エネルギーを使うにしても、中位の生き方が合っているわけです。ゆえに、忙しすぎるとエネルギーが不足してきます。

逆に——楽すぎると、エネルギーが余ってしまうので、

<sup>いそが</sup>忙しすぎても、<sup>らく</sup>楽すぎても良くないわけです。

つまり、普通の環境に向いています。

### 普通の生活に向く

普通の生活に向くということは：

〔忙しすぎる〕〔楽すぎる〕どちらもよくないのです。  
苦勞が多すぎるのも合っていませんが、苦勞が少なすぎるのも合っていません。ほどほどがいいのです。

「身弱は精神が強くて、身強は現実に強い」と、書きましたが、身中はその中間なので、精神と現実のいずれにも片寄らないです。

いずれにも片寄らないという意味は、もともと精神的にも現実的も片寄っていない宿命ですから、いずれにも片寄らない生き方をすることが宿命通りです。

そういう意味になるわけです。

精神的と現実的のいずれにも

片寄らない生き方をすること

参考・精神〔こころの働き。物事を達成しようとする気力〕

参考・精神的〔精神上のことをおもんずるさま〕

参考・現実〔事実として目の前にあらわれている物事や状態〕

参考・現実的〔目前の現実にあてはまっているさま。実際的であるさま〕

参考・性（せい）〔心の作用。天から与えられた本質、〕

身中の人が、現実的苦労ばかりをしていると、宿命が生きて来なくなりますし、反対に精神的苦労ばかりしても、宿命が生きて来なくなるのです。

現実面と精神面をほどほどに苦労して消化するという生き方をすることで、運勢も伸びていきますし、本人自身も生き生きしてきます。

〔たとえば〕子供の場合であれば、勉強と運動の両方をほどほどにやるとよいのです。ということです。

大人の場合は、精神的苦労と現実的な苦労との両方をほどほどにやるとよいわけです。

「精神と現実のいずれにも片寄らない」ということは、身中の人はずっと精神面と現実面のバランスがよいということなのです。

身中は精神と現実のいずれにも



片寄らない生き方をすること

もともとバランスがよい

〔身中はバランスがよい〕というのは、バランスがよいから「良い宿命」ということではないのです。

精神と現実のどちらもほどほどに強い宿命という意味です。

それゆえに、精神と現実をおなじように重視することが宿命どおりということになります。

身中の人々の生き方は、現実ばかり追い求めてはいけません。

そうかといって、精神ばかりを重視してもいけないのです。どちらもおなじように重視しながら、生きていきなさいということです。

それが一番宿命に合った姿です。

そうすることで宿命が生きてくるのです。

これは、じょうせい情性とりせい理性についてもいえるのです。

参考・情性〔人情と性質。感情のはたらき〕

参考・理性〔感情に動かされたりしないで、論理的に考えて、物事の  
そうあるべき姿を判断する〕

身強の人はどちらかといえば、情性のほうが強くて、  
身弱の人は理性のほうが強いわけですが、身中は中間  
です。情性と理性のバランスが取れているわけです。

**身中は、情性と理性のバランスがよい**

これらが身中の特徴です。

⇒ 大きく分ければ『身強・身弱・身中』の三つに分け  
ますが、もう少し詳しく分類を考えますときには、  
最身強（さいみきょう）と呼ばれる宿命があります。

人体図に【天将星】 【天禄星】 【天南星】 の〔強星〕が  
1 つでもあれば身強ですが、人体図に強星が2 つ以上  
あるものは、身強のなかでも、特に強い宿命だという  
意味で最身強といいます。

**最身強 ⇒ 強星を2 つ以上もつ者**

人体図に【天禄星】 【天南星】 の2つをもっているとか、  
【天将星】 が2つあるとかの人体図です。

とにかく〔強星〕を2つ以上もっていれば、最身強の  
人体図です。

最身強は、身強の性質が特に強く出ます。

**最身強 ⇒ 身強の性質が特に強い**

身強の人は気が強いですとか、過保護に育てられると  
よくないですとか、現実的苦労に強いですとか、そう  
いった身強の性質が、特に強く出るのが最身強です。

反対に、最身弱（さいみじゃく）と呼ばれる宿命があります。

**最身弱 ⇒ 弱星を3つ人**

【天報星】 【天胡星】 【天極星】 【天馳星】 が〔弱星〕で  
すけど、従星3つともが〔弱星〕だとすれば、身弱の  
なかでも、特に弱い身弱だとして、最身弱（さいみじゃく）  
ということです。貴乃花がそうでしたね。

これは、身弱の性質が特に強い人になります。

**最身弱 ⇒ 身弱の性質が特に強い**



通常は『身強・身中・身弱』の段階に、分類して見るわけですが、もう少し詳しく観ていくときは、最身強と最身弱を加えて、五段階にエネルギーを分類します。それゆえに、人体図の十二大従星を5つの強弱の段階に分類して観ていくようになります。

「最身強・身強・身中・身弱・最身弱」については、  
 「どれが良くて」「どれが悪い」ということはありませんが……結婚して一緒に生活をして行くということになりますと、片方がエネルギー多くて、片方はエネルギーが少ないと、生活のペースが違う夫婦の組み合わせということになります。

特に結婚について「結婚の相性の組み合わせ」というのが決まっています、下記のようになります。

結婚の相性：

身強と身強は○	身中と身弱は△
身中と身中は○	最身強と身中は△
身弱と身弱は○	最身弱と身中は△
身強と身弱は×	身強と身中は△

しかし——相性の観方は、これだけではありません。  
ほかにもいくつもあります。

それらを、総合的に観て〔相性が良いほうなのか〕

〔相性が悪いほうなのか〕〔相性は普通なのか〕という  
のを決めていきます。

この ○× については、身強・身弱の部分だけでは、  
こうなりますよ。ということです。

身強・身弱では、相性が悪いのに、ほかの技法で観ると、  
相性がすごく良いという場合も、当然あり得るわけ  
です。

ただ、身強・身弱は、相性を観るうえで大きな焦点にな  
ります。

このポイントを押さえるようにしておくことです。

☞ 夫婦のあいだで、エネルギーの差がありすぎると、  
一緒に生活していくうえで、どうしてもギクシャクし  
て行くようになってしまいます。

〔たとえば〕身近なことでは、今日はお天気がいいか  
ら、散歩にでも行きましようかと誘ったら、夫は疲れる

からイヤだと、そういったことが<sup>たびかさ</sup>度重なると、何年かたつうちには、夫婦の間にマイナス要因となって出てくるわけです。

「うちは身強と身弱だけど、とっつてもうまくいっているわ」となると、本当はうまくいくはずがないのに、うまくいっているとなると、どこかに犠牲を出します。

〔たとえば〕とても仲が良い夫婦なのに、夫が病気になったとか、子供が交通事故で亡くなったとか、その現象はさまざまです。

これからも『身強・身弱』については、勉強のなかで理解を深めていただきたいと思います。

【初年】 4 2 回目【身強・身弱・身中】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 4 3 回目【十二大従星力学③】です。